DYNAMIS, **10** (2006), *53–67*

指示・その原理と空間・時間表現の接点

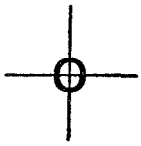
李 長波

1. 指示詞にとっての空間と時間

1.1. 指示場：「わたし：今・ここ」

紙の上で二つの線分が垂直に交わるとき、それはひとつの座標系を示し、0によって示された交点は座標の出発点、つまり原点を表わしている。

この図式が人間の言語の指示の場を表示しているとすれば、0の位置には三つの指示語、つまり hier [ここ] jetzt [いま] ich [私] がおかれていなければならない。(Karl, Bühler 1934 日本語訳：上巻 120)



図

というのは Karl, Bühler 1934 の Zeigfeld 指示場の図式化と説明である[1]。このように、指示場の原点におかれた「ここ・いま・わたし」であるが、この三者の関係は果たしてどうであろうか。我々にとって、この三者が同一平面上に均質的に並ぶ関係ではないことはすぐに思いつくところである。というのは、カントを持ち出すまでもなく、「いま・ここ」が「指示場」としては常に相表裏をなす関係にある二者であり、「私」は発話の産出者であると同時に「いま・ここ」を認識する主体だからである。「私」は「いま・ここ」に色濃く自らの刻印を押しているのである。

とすれば、Karl, Bühler の「ここ・いま・わたし」を、「私：いま・ここ」のように書

[1]因みに、Karl, Bühler も、W. v. Houmblt と E. Cassirer と同じく、代名詞は名詞の代わりをするものではない、という考えを出発点としてるようである。Karl, Bühler はいう、

> 指示は不可欠である。しかし、名詞の代りをすることの必然性はない (demonstrare necesse est, stare pro nominibus non est necesse.)。Karl, Bühler 1934 (日本語訳 1983：143 頁)

このように、W. v. Houmblt と E. Cassirer と同じく、「代名詞」は名詞の代わりをするものではないという認識に立って、Karl, Bühler は、Deixis 直指表現の機能は物を表す (bezeichnen) ことではなく、単に指し示す (hinweisen) ことにあるとして、Deixis 直指表現を Zeigfeld 指示場における Signal 信号と規定した。かくして指示詞の意味機能を、コミュニケーションの場における人間の内的・外的知覚と行動のプロセスに求めたのである。

きかえても、決して無意味なことではないであろう。これによって「私：いま・ここ」指示場の原点において、「私」を核として、正に時間・空間表現がその広がりにおいて種々の姿を現す、ということを示せるからである。指示体系と人称体系との相関も、正にこの指示場の「原点」の「中心」であり、「人称体系」の「中核」である「私」を中心とする関係なのである。例えば、W. v. Houmblt はいう、

> [言語の問題を考えるとき]、原点となるものは、言うまでもなく語り手自身が人間であることである。語り手は自然と常に直接に接触しているものであり、言語においても、自然に対して自我という表現を対置することをやめるわけにはいかない。(W. v. Houmblt 日本語訳：164-165 頁)

しかし、ここにいう「自然」とはドイツ語の natur を直訳したもののようであり、日本語としては誤解を招きかねない。ドイツ語の natur は印欧語の常として、人間・精神・人工などと対立してとらえられるのが常であり、厳密には、ここの natur はむしろ話し手を取り巻く諸々の存在、つまり「外界」の意に解すべきであろう。

それはともかく、W. v. Houmblt のいわゆる、原点となる語り手自身はもちろんただ人称の核としての意味のみ持っていると理解すべきではない。それより、語り手を核とする人称体系は更に広く人称詞以外の品詞や文法範疇にも等しくその反映を見るべきものであろう。「自我」は、カントのいうように「それへの関わりにおいて諸表象が綜合的統一をうるところのもの」にほかならないからである。「動詞は、代名詞とともに、人称の範疇に従う唯一の語類 espèce de mots である」(É. Benveniste1966 日本語訳：203 頁) と言われるが、唯一か否かはとりあえず不問に付すとして、動詞がもっとも人称体系を反映しているという所以も蓋しここにあると考えられる。

しかし、動詞の定義はいろいろ可能であろうが、一般的にこれを出来事を表わす品詞とすれば、出来事が必ず特定の時間と空間において発生、現象するという意味で、動詞は人称体系の時間・空間への照射を受けているのだとも考えられる。そして、人称体系の指示体系への反映という言い方も、あくまで指示詞の側から見たものであり、人称体系の側から言えば、むしろ人称体系の指示体系への照射にほかならない。これは自我＝語り手を取り巻くもろもろの時間・空間において存在する物事を、ただ話し手を取り巻く「外界」の任意の対象としてではなく、人称体系の刻印を押しつけることによって、指示対象との関係を一種の「準所有関係」として扱う、ということでもある。ここには、動詞の人称体系において見られるのと同じことが現れているのである。つまり、

指示詞においては、指示対象は自我の世界に単に無秩序に対峙する単一で均質なかたまりをなしたり、てんでんばらばらに散在しているというのではなく、それらは自我＝語り手又は両者への「近さ」と「遠さ」（物理的・心理的な意味において）などさまざまな層に従って、対象化されたものが指示対象として指し示されるということの意味に外ならないと考えられる。

このように考えれば、指示詞も専ら空間的なものを指すことだけというわけでなく、現前の知覚対象に対してはその空間的な距離が主に関与し、その空間的な距離に即して、その内面に人称の関係があるとすれば、現前しない指示対象、同じく「時間的非近・遠」に属するものは正に談話の「いま・ここ」に対する「非いま・非ここ」の対象として捉えられることにほかならない。ここにも人称の関係が時間的な距離に対応して指示体系に含まれているのである。

しかし、これはあくまでも指示体系における時間・空間表現の分化と、時間・空間とも「近・非近」による分化を前提としているかぎりのことであることに注意しなければならない。実際、言語の歴史において、「近・非近」による空間分割に先行する指示体系が存在することがそれを物語っている。そればかりではない、「いま・ここ」という時間・空間がいまだに未分化のまま融合することもあり得るのである。とすれば、指示詞にとって空間分割それ自体必ずしも始原的なものではないということになる。

1.2. 空間指示は指示詞にとって始原的なものではない

空間分割が指示詞の始原的な用法ではないことを示す例は、まず上代日本語と甲骨文字の時代の中国語の指示詞に見ることができる。それはまさしく空間的な遠近によらない指示体系の存在である。

上代日本語の三つの指示詞「コ・ソ・カ」のうち、「カ」が「コ」から母音交代によって分化したものであることは疑いない。とすれば、その分化以前の指示体系は、恐らく「コ・ソ」の二元対立をなしていたものと推定される。そして、「コ・ソ」の二者対立の指示体系は何よりも、「知覚対象・観念対象」の対立を区別の原理としていたと考えられる[2]。つまり、指示対象の空間・時間的な「近・非近」の区別以前に、「私」にとって現前する知覚対象と、「私」にとって現前しない観念対象とによって指示詞が使い分けされていたのである。しかし、この区別の根拠は対象が知覚的な存在なのかそれとも観念的なものか、という対象の存在の仕方であると同時に、指示対象に対する「私」の経

[2]詳しくは拙稿 1998、拙著 2002 を参照されたい。

験の仕方が直接的な経験なのかそれとも非直接的な経験という、物事を把握する仕方に基づくものと考えられる。ここでは、指示対象はいまだ時間的・空間的に対象化されたものではなく、それを「私」が如何に認識しているか、という認識の仕方によって対象化されているのである。「いま・ここ」よりひとり「私」だけが原点をなしていたと言ってもよい。

上代日本語と同じ現象は、甲骨文字時代の中国語の指示詞にも見られる。そこにも遠近の区別をしないという指示詞「茲・之」があり、これまでとかく「近称」とされてきたものである。しかし、これは西周・先秦時代以降一貫して「近称」の指示詞として用いられるという結果によってそれ以前を逆推したに過ぎない。遠近の区別をしないということと、「近称」の存在は明らかに相矛盾する関係にあることはいうまでもない。実のところ、甲骨文字の時代では、この遠近を区別しない「茲・之」は正しく知覚対象を指すものであり、対する「其」はむしろ観念対象を指すものだったのである[3]。

「之・茲」が、西周・先秦、漢代と、古代語から中世語（漢代から隋・唐の時代まで）をへて、一貫して「近称」指示詞として用いられるのに対し、「其」はその間一貫して観念指示の指示詞として用いられたが、確かな文献資料では、唐の時代に「其」から「渠」という「非一人称」を指す人称詞の用法を生み出すことになる。

一方、「彼」の発生はこの両者にかなり遅れて、文献的には西周の文献に最初に現れることが確認されている。しかもこの「彼」は同じく近称指示詞であった「惟」に対してそれを否定するところの「非惟」として成立したことも、上代日本語の「コ」に対する「カ」と同じ軌跡を描いているのである。

以上は古代中国語と古代日本語における遠称指示詞の発生とそれに先行する指示体系のあらましであるが、問題はなぜ現前する対象一般（遠近の区別をしないという意味において）を指していた「茲・之」と「コ」が、空間的な遠・近の区別原理の導入に際し、「遠称」に対する「近称」にならなければならなかったのか、である。これはやはりその区別原理の拠って立つところに原因を求めなければならない。というのは、「私」にとって現前する対象はとりもなおさず「私」にとって親しく経験するところのものであり、もしこの「私」にとって親しく経験するところの物事を更に空間的な遠近によって分けようとすれば、当然「私」にとって親しく経験する物事の内、「いま・ここ」に「近」のものとならなければならない。つまり「近・非近」という時間・空間の原理を導入することによって、指示場の「いま・ここ」が初めて切り出されるのである。指示場

[3]拙稿 2007 を参照。

の「いま・ここ」に対する「非いま・非ここ」がその対立の一極を担わされることになる。時間・空間の「近・非近」の区別による指示体系とそれに先行する「私」の直接経験・非直接経験に基づく指示体系の間には、これも一貫して指示場の原点である「私」がいるのである。上代日本語には、ちょうど「コ」が「カ」と二元対立をなす以前の段階におけるある広がりを持った用法を残しており、「カ」の出現によって「コ」の用法が狭められていく過程が悉に観察されることも、以上のような指示体系の体系化の過程を裏づけている[4]。

1.3. 指示詞における空間分割の方法と聞き手への参照

前節では、時間的・空間的「近・非近」による区別原理に先行して、「遠近」の区別をしない指示体系において、「私」にとって現前する対象を指す「知覚指示」と、現前しない対象を指す「観念指示」とが二元対立をなしていた実例を、古代中国語と古代日本語に見た。実際、「近・非近」或いは「近・遠」による時間的・空間的な原理はひとり空間的な区別にとどまらず、むしろそれと同時に時間的な区別としても働いていたことはいうまでもない。時間的な分割を次節に委ねるとして、ここでは空間分割の方法について論を進めたい。

世界中のすべての言語において、指示詞を持たない言語は存在しないほど、指示詞は普遍的な文法範疇である。その中で、指示詞を四つ以上持つ言語も存在するが、殆どの言語の指示詞は「二分」又は「三分」、つまり空間指示詞において「二つ」あるいは「三つ」の指示詞を持つ言語が大多数であるといわれる[5]。四つ以上の指示詞を持つ言語の詳細については、幾つも報告されているが、記述的な枠組みが記述者の恣意に左右されやすく、その実体について身近な言語同様に内省も文献的な徴証も出来ないため、言及を控えなければならない。ここでは身近な言語での歴史的、あるいは現代語における様相の観察に基づいて論を進める。

先にみたように、古代中国語と上代日本語の指示体系の間にその体系化の初期段階において、ある平行性が認められた。しかし、両言語のその後の発展はそれぞれ最終的に三者対立の体系となった日本語と現代語まで二者対立の体系を維持してきた中国語との間で異なった展開が見られた。まずこの事実を手がかりとしたい。

上代日本語において、指示詞が語形こそ三つ揃ったものの、体系的にはまだ二重の二者関係としてあったことも拙稿 1998、拙著 2002 の示したところである。それは「ソ」

[4] 拙著 2002 第三章を参照。
[5] 吉田集而 1982 を参照。

系指示詞がなお暫くの間「観念指示」に留まり、この状態は文献的には「ソ」の知覚対象を指す用例が平安時代の古今和歌集1007番において最初に観察されるまで続いた[6]。

さて、「ソ」がなぜ知覚対象を指す用法を持たなければならなかったのであろうか。この問題に対する答えは、さきに見た、「コ」がなぜ近称に落ち着かなければならなかったのか、という問いと表裏一体の関係にある。すでに空間的な分割において「近・非近」が「コ・カ」によって区別されている以上、このもともと「観念対象」を指していた「ソ」の知覚対象指示への闖入には、強力な要因が働いていたと考えなければならない。一方の中国語がずっと二者対立の体系を維持できたという逆の事実もこのことを裏づけている。その要因は何か、両者の指示体系の体系化の分かれ目はいったいどこにあるのか。これについては、まず日本語の「ソ」がなぜ知覚対象指示に闖入しなければならなかったのかということから見てみたい。

実際、「ソ」はすでに空間的な分割において「近・非近」が「コ・カ」によって区別されている指示体系の「うめぐさ的な」ものとして入ってきたわけではけっしてなかった。むしろ初めから特定の空間的な領域を目指していたことが明らかである。それは、「イマ」を共有しながらも、「私」よりは「聞き手」が深く関わるような空間、またはその空間に存在する指示対象だったのである。しかし、従来言われてきたように、「ソ」が知覚指示の用法を持ったその日からすでにもっぱら「二人称領域」を指していたと考えるべきではない。それは上代語において二重の二者対立に対してあるところの、人称対立の「一人称対非一人称」中の「非一人称」としてしか入ることが許されなかった、いわば当然の在り方であった。この事実の物語るところは、二者対立の指示体系と三者対立の指示体系の区別の根幹にかかわることを意味しているように思われる。それは、「聞き手」への参照の有無、参照する・しないは、すべて指示場の原点である「私」の裁量にかかっているのである。これを「聞き手」の側から言い直せば、「聞き手」が参照点として空間分割に導入されるか否か、これを指示対象に即して言えば、さきの二つの規定の当然の結果として、唯我独尊的な「私」を軸とする対象化の仕方に徹するか、それとも指示対象をめぐる「私」・「あなた」との関係によって指示対象を対象化するか、という分かれ道でもある。これを人称体系に即して言えば、「一人称対非一人称」の体系と、「一人称・二人称対三人称」の体系の分岐点であり、二者対立の指示体系は前者に、三者対立の指示体系は後者に対応する。

さて、中国語と日本語の指示体系の体系化の分岐点は、「聞き手」を参照するか否か

[6]詳しくは拙著 2002 第三章を参照。

にあることの意味はどこにあるのであろうか。これについては、かつて次のような仮説を立てたことがある。

> 日本語における対人関係の原理は、「上・下」の関係と「内・外」の関係で見れば、「内・外」の原則が「上・下」の原則を支配するのに対して、中国語における対人関係の原理は、「上・下」の原則が「内・外」の原則を支配するものである。これがつまり中国語の指示詞が一貫して二本立てを基本とし、しかも一貫して「一人称対非一人称」の人称対立をなすのに対し、日本語の指示体系は二本立てから三本立てへと変化し、指示詞における人称対立も「一人称対非一人称」から、「一人称対二人称」それに「三人称」という三者対立に変わっていったということの語用論的な動機ではないかと考えられる[7]。

この仮説はいまも変わらないが、「～を支配する」を「～に対して優先する」と表現を改めたい。

指示体系の言語類型に即していえば、「聞き手」を参照するか否かによって、「空間指示詞」（吉田集而 1982 の用語）の二大類型に分けられると考えられる。吉田集而 1982 のように、「空間指示詞」をもっぱら「話し手」からの物理的な距離によって細分する方法は前者にのみ該当し、後者の指示体系に対する説明力を持つことが期待できない。

2. 時間分割の諸相

これまでは「近・非近」による空間分割を中心に見てきたが、時間の表現に即していえば、「近対非近」による時間分割の最も顕著な例は、「現在」を中心として、いまだに「過去・未来」が分離せず、両者が同じ言語表現を持つ場合である。E. Cassirer1932 によれば、

> エウェ語においては、同じ一つの副詞が「昨日」を表わすのにも「明日」を表わすのにも用いられる[8]。シャムバラ語では同じ語が蒼古の昔とはるかな未来の両方を指すのに使われる。この言語の研究者の一人がきわめて特徴ある言い方で次のように述べている。「この著しくわれわれの目を惹く現象は、ヌトウ黒人たちが時

[7]拙稿 1999 を参照。

[8][原注] Westermann: Ewe-Grammatik, S. 129. 多くのアメリカ諸語における同様の現象については、たとえば K. v. d. Steinen: Die Bakairi-Sprache, Lpz. 1892, S. 355. を見よ。トウリンギット語にあっては、未来と過去とを表示するのに同一の接頭辞 gu-または ga-が用いられる（Boas: Handb. I, S. 176)。またラテン語の olim(ille からくる) は蒼古の昔とはるかな未来の両方を表わす（ドイツ語の einst を参照)。

間を物のように見ており、それゆえ彼らにとっては今日と今日でないものがあるだけだということから自然に説明される。この今日でないものが昨日あったのか、または明日あるのだろうかということは、この人びとにとってはまったくどうでもよいことなのであって、その点について彼らは考えをめぐらさない。なぜなら、そうするためには単に直観だけではなく、時間の本質についてのある思考とある概念的表象とが必要だからである。<時間>の概念はシャムバラ族にとっては無縁であり、彼らは時間の直観だけしか知らないのである。われわれ伝道者にとって、自分たちの時間概念から解放され、シャムバラ族の時間直観を理解することがどれほど困難であったかは、われわれが長年のあいだ、未来だけを表示する［彼らの］形式を探しもとめてきたということからもわかるであろう。幾度もわれわれは、この形式を見いだしたと思って喜んだが、やがてーーー時としては、数ヶ月も後になってはじめてーーーこれがぬか喜びであったことを知るのであった。というのも、その見いだされた形式が［彼らによって］過去についても使われるということがそのつど明らかになったからである」[9]。（日本語訳：289-290 頁）

まず、E. Cassirer1932 の挙げた、エウェ語の例が、時間分割の方法としてはまさしく「私」を軸に「私・非私」の二分法によって時間を「いまと非いま」に分割しているということに注目したい。このような「過去」と「未来」が区別されないような時間分割の仕方は、われわれ現代人にとって奇異に思われるのも当然である。われわれはいつのまにか時間は過去・現在・未来という三つに分けられるという観念を所有することになり、そして「過去」と「未来」があたかも本質的な違いを持つ無縁の両者として意識しているからである。しかし、エウェ語の場合は、いみじくもこの三者が同一平面上に均質的に鼎立するものではないことを示しているのである。

このような「いま・非いま」という時間分割の仕方が、空間的な「近・非近」に対応することはもちろんのこと、両者が等しく指示場の原点の核をなす「私」に対して、それ以外の領域として「私」の周辺を取り巻くもろもろの存在に投影されているのである。

しかし、これは原理的な説明にしかすぎない。実際、時間表現と空間表現そのものもいつか分化し、それぞれ異なる過程をたどって、それぞれ異なる分割の方法を所有することになるからである。エウェ語の例を除けば、時間表現に対してほぼ共通の認識になっている「過去・現在・未来」という観念を持っており、特に印欧語においては「過

[9][原注] Roehl: Versuch einer systemat. Grammatik der Schambalasprache, Hamburg 1911, S.108 f.

去・現在・未来」という三つの時間の在り方に対し動詞の形まで対応させようとするような言語があるのに対して、空間表現においては、二者対立の「近・非近」、三者対立の「ワタシ」「アナタ」「カレ」に対するそれぞれの空間分割のように、われわれはむしろより豊かなバリエーションを知っているのである。空間表現よりもむしろ時間表現の斉一性が、顕著に認められるところである。対して、空間表現において「近・非近」という原理がいまなお強固に多くの言語において維持されている。時間・空間という原理的な平行性に対して、言語表現に於けるそれはその平行する時期がもはや遙かな歴史の彼方に消え失せていたのである。しかし、それを窺い知る資料は、より古い時代の文献を残している言語においてわずかにその痕跡が残っていることもある。印欧語のことはいざ知らず、甲骨文字のなかの時間表現は、エウェ語ほど明瞭ではないが、ちょうど「いま・非いま」から「過去・現在・未来」への時間認識と時間表現が体系化されるその中間的な様相を呈しているのである。

2.1. 甲骨文字「昔」・「今」・「來（翌）」

これまでのところ、甲骨文字のなかで、時間を表わす言葉は、過去を表す「昔」、現在を表わす「今」、そして未来を表わす「來」・「翌」の三つが主な語彙として報告されており、甲骨文字の「來」と「翌」については、姚孝遂 1985 は、「卜辭於一旬内之干支稱『今』、下一旬之干支稱『翌』、再下一旬之干支稱『來』。」との指摘があり、時間的な遠近の差があるようだが、共に未来を指す言葉であることは明らかである。対して、「今」については、

> 今字的造字本義、係于A字的下部附加一個横劃、作爲指事字的標志、以別于A、而仍因A字以爲聲。」（于省吾 1979：456 頁）

という于省吾 1979 の説明に従ってよいが、残る「昔」についてはいまだ拠るべき説がない。一般的に知られているのは、葉玉森の説である。

> 契文昔作「[illegible]」「[illegible]」、从「[illegible]」「[illegible]」乃象洪水、即古「[illegible]」字。从日、古人殆不忘洪水之災、故制昔字取誼於洪水之日。「[illegible]鼎」作「[illegible]」、上亦从災。奚度青曰：「昔从災日之説至精。楊子法言所云『洪荒之世』、即古昔誼。」（説契二葉）

というのである。字形の解釈としては「[illegible]」を水に関係する字形とするのは概ね従ってよいが、「古人が洪水の災害を忘れないために、洪水の日という意味に因んで「昔」と

いう文字を作った」というのは憶説と言わなければならない。われわれにとって、時間として「非近＝遠」に属する物事はあるいは忘却の彼方に消え失せたり、あるいは遙か彼方から蘇ってきたりするものであり、この「消え失せる」（忘却）と「蘇る」（想起）があたかも我々の「記憶」の在り方なのではないか。とすれば、この「　」の字形は恐らく実際の洪水そのものではなく、時間を水の流れに喩えたものと解すべきであろう。「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍昼夜。」（論語）の「逝者如斯夫」と同一の発想とみてよい。ここでは、「昔」の字義を「流れのように過ぎし日」に解したい。

これに対する「未来」を表わす「來」という語は、「来たる」の意味の通り、「まだ来ない」ものの時間を指すのである。つまり、これも時間を一つの流れとして把握していたのであり、しかもそれが「未来」から今へ、そして今から「昔」へと流れるようなイメージで捉えていたことに注目しなければならない。しかし、これはそのまま先の「昔」の字形にあった「川」が今から過去への流れていく、まさに遠くへ流れさった「物事」に因んだ文字であることになるわけではない。というのは、時間の捉え方としてもう一つあるのは、時間が過去から今、そして未来へと流れるものだする捉え方が一方にあるからである。「昔」という文字に込められた古代人の時間認識が果たしてこの二つの時間の捉え方のどちらなのであろうか。あくまで推測の域を出ないが、恐らくより主観的な捉え方、つまり過去から今への流れとして捉えていた捉え方のほうが、より客観的な時間の捉え方に先行するものと考えられる。というのは、前者のほうが、人の運動に伴う時間的な経過の経験に平行するからである[10]。

しかし、「昔」「今」「來」という三つの時間名詞が揃ったからとて、われわれ現代人が常識として持っているような「過去」・「現在」・「未来」という三つの時間が平面的な三者対立をなしているということを意味するわけではけっしてない。われわれは、「今」と「昔」、「今」と「來・翌」との間に同一ならざる関係を見出すからである。未来を表わす言い方の「翌」はすでに夜があけた現在、或いはいますでに始まった干支の間を前提に、その近接した、次の夜があける時間、次の干支が始まる時間を表わすものなのである。そして、甲骨文字の明日の朝という意味の語「復旦」も、明日の「朝」を今朝の再現として捉えているのも同じである。

してみれば、これはまさしく「今」と「今の干支」の延長としてある未来であり、「今」に対立するものではない。「昔」が「いま・非いま＝近・非近」によって「イマ」から

[10]管見のかぎり、時間・空間認識に運動が強く関与していることを明確に指摘したのは、渡邊慧 1948 である：「あらゆる國の言葉で空間的な前後と時間的な前後が混同されているということは非常に重要なることを教えている。即ち自らの運動が空間の第三次元（奥行）と時間の前後とを同時に表象させるのである。最初に行動があり、それから空間と時間とが生じるのである」（174 頁）。

分裂したのと対照的である。前者の場合、両者の間にある断絶を持つのに対して、後者の場合はあくまでもその延長であるところの「分裂」ならぬ「分立」というのに相応しいものである。われわれは、ここに「今」から「過去」、そして「今」から「未来」が分化される二通りの分化の仕方をみることができる。古代語の言語事実に基づいたものではないが、渡邊慧 1948 の次のような表現が、時間の本質を鋭く見抜いたものとして、言語史における時間表現の成立を考えるうえで大いに参考になる。

> 動物では過去は現在に“融合”されている。人間でも過去は現在に“含まれて”いるが、過去を現在から區別することを知つている。發生的にいえば、過去は現在が分裂して生じたものである。(170 頁)
>
> 過去が現在から分裂して生じる如く、未來も現在から分裂して生じたものである。すべての源泉には現在における行為がある。(174 頁)

これは、甲骨文字時代の殷人の時間意識によって裏付けられるところである。

2.2. 先秦時代の副詞「且・已」

ここにもう一例、語彙レベルに現れた時間意識に関わる言葉がある。先秦中国語の時間副詞、「且・已」である。『墨子』の「名言類」に属する上經：33 である。

> 【經】且、言“且然”也。(上經：33)
> 【説】且○自前曰且。方然亦且。自後曰已。
> 【經】且。且、然を云ふなり。
> 【説】且。前自よするを且と曰ひ、後自りするを已と曰ふ。方に然かるもまた且なり。

これについては、山田琢氏は、高亨『墨子校詮』の解釈に従って、次のように解釈している。

> 【經】且。且の言は然なり。
>
> 【説】且。前自りするを且と曰ひ、後自りするを已と曰ふ。方び然るも亦た且なり。
>
> 【經】且。且という言葉は、然（そうである）ということである。【説】且。事前において言う場合に且（まさにそうなる）といい、事後において言う場合の已

（すでにそうである）と区別する。兩事が並びにそうである場合にもまた且という。（454 頁）

どうやら『墨子』の上經：33 を、「且」の語彙的な意味解釈と断じているようであるが、『墨子』のなかで、かかる「辞書的な説明」は珍しい。

ここはやはり、これを古代中国語における時間の表し方に関するものとして、まず現実世界の時間の分割である、「過去」（已）、「現在」（方然）、「未来」（自前）に対して、言語における時間の表現は、古代中国語においては特にそうであるが、「過去」（已）に対して、「現在」（方然）と「未来」（自前）が同じ「且」という時間副詞によって表されるように、過去の「已」に対して、「未来」と「現在」は共に「現在」乃至その延長において捉えるという、文法的な言語事実を説いたものと見るべきであろう。とすれば、これはもはや一語彙としての「且」の意味解釈ではなく、文法的な意味での時間を説いたものということになる。譚戒甫 1981 は、その根拠を示していないが、「在語法中、動作的時候可以分爲三期：（一）自前曰且、意即由前説後叫做『且』、爲未來；（二）自後曰已、意即由後説前叫做『已』、爲過去；（三）方然亦曰且、意即方今如此、不前不後、也叫做『且』、爲現在。」と、過去・現在・未来に解釈しているのは正しいとしなければならない[11]。

要するに、「且・已」の対立による時間分割も、「今対非今」＝「近対非近」の違いになるのである。これは『過去・現在・未来』という観念そのものの分離ではなく、あくまでも言語における時間表現の「今対非今」の対立であることはいうまでもない。そして、ここでは過去が現在より分裂はしたものの、「過去＝非今・非近」に対する「今」は過去との断絶に対し、「未来」にまで広がりを持つということにおいて、恰も指示体系における「カ」を派生させる以前において「ソ」に対する「コ」が自ずからある広がり

[11]管見の限り、「且」に「今」の意があるということを最初に明言したのは、王引之『經典釋詞』のようである。そこでは、詩經・載芟：「匪且有且、匪今斯今、振古如茲。」の「且」に対する鄭玄の箋「且、此也。」と『正義』曰：「今謂今時、則且亦今時、其實是一、作者美其事而丁寧重言之耳。」を援用し、更に、『書經』・費誓「徂茲淮夷、徐戎竝興。」を例に、「『徂』讀爲『且』、今也。言今茲淮夷、徐戎竝興也。」と解しているほか、「且夫者、指事之詞。『且』與『今』同義。或言『今夫』、或言『且夫』、其實一也。」との解釈を加えている。近代に入っては、楊樹達『詞詮』以下の辞書類には「今」の意味についての記述が見あたらない。筆者の目にした用例は、同じ詩經・溱洧：「女曰觀乎？士曰既且。且往觀乎？」（鄭箋云、女曰觀乎？欲與士觀於寛・之處。既、已也。士曰、已觀矣。未從之也。）の「且」が士の「既且」（「且」、音徂、往也」とする鄭箋に従う）の「既（已）」（過去）に対するものとすれば、これも「今に・これから」という将然の意味よりは、「今・現在」という意味に解することが可能ではないか。「正にしようとする」という「将然」の「いま・今」は「今現在」の意味をもつ「いま・今」から派生することがあっても、その逆は考えにくい更に一歩踏み込んで言えば、「且」のなかには、「今現在」と「正にこれから」という両方の意味が未分化のまま同居しているとみるべきであろう。現代日本語の例であるが、「今・今度」に今現在のこととともに、近未来のことも指し得ることも、言語における時間意識・表現の「古法」の名残に違いない。『墨子』・上經：33 は、正にこの「且」の「古法」の観察を通じて、言語の時間表現にも言及したものとみるべきである。

をもつのとと平行するものである。

2.3. 日本語の「いま」の場合

これまでは、古代中国語における時間表現の成立について、甲骨文字からは、「過去・現在・未来」を表わす時間名詞、副詞としては、先秦時代の「且」と「已」を見てきたが、これと同じように、「非近」に対する「いま」も更に近未来をも指すことが可能なのは、上代日本語の用例に徴して明らかである。万葉集の例を示せば、「のちにも逢はむいまならずとも」(699) は「今現在」を、「今助けに来ね」(記紀歌謡 14) は「今すぐ」という近未来のことを指す例である。そして、「今さっき」という「過去」の時間をさす例は中世末期の言語を残しているとされる、狂言台本に確認されている。「太郎冠者、いまの物を出せ。」(虎明本狂言・岡太夫) [12]。中国語の「昔・今・來 (翌)」という時間名詞よりも示唆的なのは、発生的に「いま」と「いますぐ」の意味が早く、「いまさっき」という意味が派生したのはずっと後の時代のことだということである。これはけっして偶然ではない。この事実は、「イマ」と未来との間の分化が、「イマ」と「過去」との分化よりも遅いことを示唆しているのではないかと考えられる。時代は恰も同じ上代語において、空間指示において知覚対象が「近・非近」によって分けられるようになって間もないころだったことも、ここで想起されてよい。更にいえば、「近未来」の意味を持つ「イマ」は「遠い未来」に対するものよりも、「遠い過去」ではないという意味において「イマ」の持つところの広がりであり、対して「イマサッキ」という意味的な広がりを「イマ」が持つようになったのは、「イマ」と「イマスグ」という広がりをもつ「イマ」に対するものとしてあったのである。そして、この二つの対立の結果として、われわれは現代日本語において「イマサッキ」・「チョウドイマ」・「イマスグ」という「近過去」・「近未来」まで広がりを持つ「イマ」を持つようになった、ということになる。これが現代語の「イマ」の意味的な広がりに対する言語史からの説明である。しかし、これは日本語においてこの「イマ」に「いまさっき」という意味が派生する時点においてすなわち「未来」を表わす表現が「イマ」から分化したという短絡的な結びつきを意味しないことはいうまでもない。ここに見るところの「イマ」は、あたかも「未来」から「イマ」へという流れと、「過去」から「イマ」へという流れの合流地点に当たるのである。聖アウグスチヌスが“過去、現在、未来の三つの時間があるというのも適当でない。しかし過去に関する現在、現在に関する現在、未来に関する現在

[12]大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』補訂版、1990 年を参照。

なる三つの時があるといったら、おそらく当を得ていよう”（『告白』11/20）といったのは、蓋しこのことの謂いであろう。

3. まとめ

本稿は指示体系における時間・空間の「近・非近」の分割以前の指示体系においても、時間・空間の「近・非近」の対立による指示体系における区別原理においても、同じく指示場の原点「私」を軸とすることをふまえ、Karl, Bühler の提示した、指示場の三つの原点のうち、「私」を「いま・ここ」に対してより核心的なものとして位置づけた。そして、指示体系に人称体系が投影されるのと平行する現象として、時間名詞、時間副詞などの時間表現についても、「過去・現在・未来」という三つの時間の分け方に先行するものとして、「近・非近」という二元対立による時間表現があったことを指摘し、そこに指示詞と時間・空間表現の接点を見出した。指示詞の区別原理である、「一人称・非一人称」、「直接経験・非直接経験」、「時間的・空間的近対非近」などに関連するその他の言語事象について論じる余裕を持たなかったが、具体的な時間・空間表現ではない、助動詞の「キ・ケリ」と「ツ・ヌ」、存在動詞の「ヰル・ヲリ」などについても、指示体系の原理と通底する区別原理が働いていることは十分考えられる。併せて今後の課題としたい。

参考文献：

于　省吾 1979 『甲骨文字釋林』、中華書局。

郭　錫良 1989 「試論上古漢語指示代詞的體系」、『漢語史論集』、商務印書館、1997 年（初出：『語言文字學術論文集』、知識出版社、1989 年）。

姚孝遂 1985 「讀小屯南地甲骨札記」、『古文字研究』第十二輯、107-124 頁。

吉田集而 1980 「指示詞にみられる空間分割の類型とその普遍性」、『国立民族学博物館研究報告』第 5 巻 4 号、933-950 頁。

吉田集而 1982 「会話場面における人の概念の類型論（I）——人称代名詞の etic な成分の再考——」、『国立民族学博物館研究報告』第 7 巻 3 号、550-584 頁。

李　長波 1994 「指示詞の機能と『コ・ソ・ア』の選択関係について」、『國語國文』第 63 巻第 5 号、37-54 頁。

李　長波 1998 「日本語指示体系の史的変化について」、『國語國文』第 67 巻第 12 号、18-38 頁。

李　長波 1999「古代中国語の指示詞とその文法化について」、Dynamis,Vol.3、京都大学大学院　人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座、45-72 頁。

李　長波 2000「『カレ』の語史とその周辺―三人称代名詞が成立するまでのみちすじ―」、Dynamis,Vol.4、京都大学大学院人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座、1-33 頁。

李　長波 2002『日本語指示体系の歴史』、京都大学学術出版会。

渡邊　慧 1948『時間』、白日書院。

Bühler, Karl 1933 *Ausdruckstheorie : das System an der Geschichte aufgezeigt.* Jena : Gustav Fischer , 1933.

Bühler, Karl 1934 *Sprachtheorie : die Darstellungsfunktion der Sprach.* Jena : Gustav Fischer , 1934.（日本語訳：脇阪　豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論：言語の叙述機能』（上・下）、クロノス、1983-1985 年）

Cassirer, E. 1923 *Die Philosophie der Symbolischen Formen.* Bd. I, *Die Sprache.* Berlin, 1923.（日本語訳：エルンスト．カッシーラー『シンボル形式の哲学（一）第一巻 言語』生松敬三・木田元訳，岩波書店，1989 年）

Humboldt, W. v. 1907 *Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java. Einleitug. Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften*, 17 Bde., Herausgegeben von der K?niglich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin: B. Behr's Verlag, 1906-1936. Einleitung zum Kawiwerk, Siebenter Band, Erste H?lfte, heraugegeben von Albert Leitzmann, 1907.（日本語訳：W. v. フンボルト『言語と精神 カヴィ語研究序説』亀山健吉訳，法政大学出版局，1984 年）

Peirce, C. S. 1960 *Speculative Grammar, Chap. 3. The Icon, Index, and Symbol*, 1893. Hartshorne, C. & Weiss, P. (ed.) *Collected Papers of Charles Sanders Peirce. Vol.* Ⅱ. *Elements of Logic.* The Belknap Press of Harvard University Press, 1960, pp.156-173.